

令和7年度 生活科学習指導研究委員会

一 研究テーマ

対象と夢中になって関わる中で、自己発揮していく子どもの育成

二 テーマ設定の理由

昨年度の本研究委員会では、丸子北小学校の「いっぱいみのって～ソルガム畑で遊ぼう～」という実践から、「専門家にいつでも聞ける」「いつでも観察できる」という「環境」の中で「ソルガム」という「材」と十分に関わることを通して、心を寄せて世話をする姿や、新たな問いをもって追究する姿が見られた。大切なことは、子どもたちが工夫を加えて繰り返し関わるができる「魅力ある材」の選定、材と十分に関わるができる「環境」を整えることであることを学んだ。

また、教師の共感的、肯定的な声掛け、願いや活動の意味を確認する声掛け、子ども同士をつなげるなどの教師の関わりの大切さも報告され、教師もまた子どもの学びを支える大切な環境の一部であることがわかった。

そこで、本年度は、昨年度のまでの研究で明らかとなった「魅力ある材」、子どもの自己発揮を支える「環境（場づくり・教師の関わり）」をもとに授業づくりや授業参観を行い、学び合うこととした。

三 研究の経過

- 第1回 5月1日 総委員会 研究テーマの設定・計画の立案
- 第2回 6月25日 「ドキドキ！流しそうめんジェットコースター！」（中塩田小）
- 第3回 7月10日 「だんごむしけんきゅうじょ」（東小）
- 第4回 10月23日 「わたしたちの和！」（和小）
- 第5回 10月28日 「大豆の時間～大きく育て わたしの大豆～」（川辺小）
- 第6回 11月11日 「キャッサバをそだてよう！」（神科小）
- 第7回 11月25日 総委員会 研究のまとめ
- 第8回 12月22日 研究のまとめ・1年間の振り返り

四 研究の内容

1 中塩田小 実践事例 「ドキドキ！流しそうめんジェットコースター！」

(1) 授業の概要

第1時	ながしそうめんのテーマと目標を決めよう！
第2～3時	竹を洗って、消毒をしよう！
第4～5時	足の高さを決め、組み立てよう！
第6～9時	竹からおわんを切り出そう！
第10時	おわんのデザインを決めよう！
第11時	おわんを飾りつけしよう！（本時）
第12～13時	流しそうめん流れるかな？リハーサル
第14～15時	流しそうめんをしよう！本番
第16時	まとめ・ふりかえり

昨年度、子どもたちからやりたいこととして挙がっていた流しそうめんだったが、他にも

やりたいことが挙がり、話し合いの結果、流しそうめんは行うことができなかった。そのため、「今年度こそやりたい！」という子どもたちの願いから、活動を始めた。当初は、流しそうめんをやることだけを考えていたが、余った竹でおわんや箸を作りたいという考えが子どもたちから挙がった。そこで、竹からおわんを切り出し、自分だけのおわんを作る活動へと広げていった。

(2) 材「竹」について

竹は比較的手に入りやすく、身近なものに使われている。そのため、流しそうめんだけでなく、お椀や箸づくりなどの活動にも発展させていけるよさがある。また、大きな機械等を使わず、子どもの力でも加工しやすい点も魅力である。

(3) 本時の主眼

そうめんを食べるおわんを作る場面で、子どもたち同士が互いに教え合ったり、協力し合ったりできるように、イメージごと、使うものごとにグルーピングすることを通して、自分のイメージしたおわんになるように工夫して作ることができる。

(4) 本時の「環境（場づくり・教師の関わり）」について

- ・事前におわんのデザインを考えておき、飾りつけに必要なものは家から持ってくるようにした。制作の途中でデザインを変えたくなくてもいいように誰でも使えるモールやビーズ、リボンなどを用意した。
- ・似たデザインの友だち同士でグルーピングをし、グルーガンを班と班の間に置くことで子どもがお互いの作品を見合ったり、教え合ったりできるようにした。
- ・作業が進まず、困っている子には一緒に似たデザインの友だちの様子を見に行き、友だちからアドバイスをもらったり、飾りつけの一部を手伝ったりした。また、事前にどんなデザインにするかを子どもたちから聞いておき、子どもたちが具体的なイメージを持てるように教師の方で書き込みをした。

(5) 子どもの姿（本時を通じた成果と課題）

- ・導入では、「人に真似されることは嫌だ」と言っていた子どもたちだったが、同じ班の友だちやグルーガン置き場、材料置き場で出会った友だちと見せ合ったり、教え合ったりする姿が見られた。
- ・グルーガンの使い方に苦戦している姿があったが、友だちがやっている姿を見たり、やり方を工夫したりすることでだんだんとうまく使いこなしている姿が見られた。
- ・自分で竹を切り出し、デザインを考え、飾りつけをすることで、自分のものという意識が高まり、「大切に使いたい」という気持ちや愛情が強くなっていった。
- ・作品に対する思いや願いがたくさん込められていたが、自分の言葉で表現することが難しく作品作りの際にどんな作品にしたいのかが分からなくなってしまったり、教師側が願いや思いを把握したりすることに難しさがあった。そのため、作った作品を写真に撮ることや絵を描くこと、子どもから聞き取るなどの方法を使って、表現方法を工夫できるようにしたい。

2 東小 実践事例 「だんごむしけんきゅうじょ」

(1) 授業の概要

第1時	「だんごむしってどんないきものだろう？」
第2～4時	「だんごむしのいるばしょや、からだをけんきゅうしよう」
第5時	「だんごむしのいのちについて考えよう」
第6時	「研究所の看板や名札を作ろう」
第7～9時	「ダンゴムシさんの『気持ち』をもっと知ろう」【本時】
第10～15時	「ダンゴムシレポートをつくろう」(生活科・国語)

A児が特に興味をもっていた「ダンゴムシ」を活動の軸に設定し、A児のダンゴムシへの関心の寄せ方のよさをきっかけとして、学級全体の学習への入口を広げた。観察や飼育を通して「だんごむしけんきゅうじょ」をつくり、活動の中で、命の扱い方への気づきや課題も生まれた。死んだダンゴムシを見た経験から「命を守る研究員」としてのきまりを子どもたちが話し合って決めたことで、よりダンゴムシの視点に近づき、ダンゴムシの好む場所や特徴など、「ダンゴムシの気持ち」を考えながら生態、特長等を調べる活動へと広がった。

(2) 材「ダンゴムシ」について

ダンゴムシは、身近で、親しみやすく、簡単に飼育することができる。さらに、わかりやすい体のつくりや動きで観察しやすい。また、行動の特徴（好きな色・好きな食べ物・好きな場所・丸くなるタイミングなど）が明確で、1年生の子どもたちにとって簡単な実験がしやすい。

(3) 本時の主眼

ダンゴムシの「気持ち」を考える場面で、ダンゴムシのいる場所や行動に着目して、観察や実験をしたり、一緒に遊んだりすることを通して、ダンゴムシの視点に近づき、ダンゴムシの生活や特徴について気付くことができる。

(4) 本時の「環境（場づくり・教師の関わり）」について

- ・ねらいや活動のゴールは全体で簡単に確認したが、調べる内容や調べ方（好きな色・場所・食べ物を調べる、じっと観察する、迷路や遊び場を作るなど）は子どもが自由に選べるようにした。箱、折り紙、野菜の切れ端など用意して置いておき、その他に必要なものは家から持ってきてよいことにした。
- ・A 評価の子どもには、観察や実験、遊び方の見通しが持てるように必要な材料や道具を用意し、C 評価の子どもには本人の願いに合った学習方法について、手掛かりとなるように友だちの活動の様子を写真で示したり、活動の始めを一緒に行ったりするなど、個の実態に応じた支援を行った。

(5) 子どもの姿（単元を通じた成果と課題）

- ・それぞれの思いや願いをもとに自分で活動を設定し、追究することで、ダンゴムシの体の特徴や性質について多様な気づきが見られた。
- ・活動時間を十分に確保し、その使い方を子どもに委ね、



子どもたちが対象とじっくり関わることで、「命を守りたい」「気持ちを知りたい」という思いが芽生え、捕まえた後に声を掛けて逃がしたり、飼育の仕方を工夫したりするなど、生き物の命を尊重する関わり方が深まっていった。

- ・活動が広がり、学びは多様だったが、発達段階的に文字で自分の考えを十分に表現することが難しく、気付きを友だちと共有したり、教師が個々の学びを把握したりする面に課題があった。今後は、絵や写真、動画の撮影など、その子どもに合った方法を取り入れ、学びの表現を自分で選べるようにする工夫が必要である。

3 和 小 実践事例 「わたしたちの和！」

(1) 授業の概要

第1時	「大豆づくりを通して感じたこと」
第2～4時	「地いきの人の『思い』を知ろう」
第5時	「地いきの人にありがとうを伝えよう」【本時】
第6時～8時	「おんがえし大きくせん！」
第7～9時	「和のいいところって？」
第10～15時	「和のよさを伝えよう！」

一人一鉢の大豆づくりに挑戦した子どもたちは、動物に食べられてしまったり、枯れてしまったりと、ほぼ全員が失敗してしまい、大豆づくりの難しさを痛感した。そんな中、春から地域の方と一緒に育てている大豆がすくすくと育っている様子を見て、「どうしてあんなに元気に育つのだろう」と疑問をもった。クラスで話し合う中で水やりや害虫駆除など、陰で地域の方が支えてくださっていることに気付いた。地域の人に対して何かぼくたちにできることはないかと考え「おんがえし大きくせん」と名付け、地域の方へ感謝を伝える活動へとつながった。地域の方と関わり、人々のやさしさに触れるなかで、「和」という地域の良さや好きなところを感じている。

(2) 材「大豆」「地域」について

「大豆」は育てるだけでなく、栄養価の高さや多様な食品に変わることなど、様々な視点から学びを深めることができる。子ども一人ひとりによって進む方向やゴールが変わり、学習の自由度が高いことも材として魅力的であると思う。

「地域」も魅力的な材のひとつである。自分たちが住んでいる場所、周りに住んでいる人に目を向けることで、自分の生活に直結させながら学ぶことができる。また、地域の方と関わる機会はあるが地域の方の思いに触れる機会はなかなかなく、子どもたちにとっても貴重な経験になる。

(3) 本時の主眼

地域の方との関わりを通して、友だちと話し合いながら相手のことを想像して、自分たちが伝えたいことやどのようにすれば地域の方に伝わるか、伝え方を考えることができる。

(4) 「環境（場づくり・教師の関わり）」について

- ・単元全体を通してどんなことを調べたいか、どんな活動をしたいか一人ひとりの願いを聞きながら進めた。願いの内容によってグループを組んで話し合いや活動を進めることで、

友だちと関わりながら全員が参加できるよう意識をした。

- ・子どもたちの視点が地域の方へ向いたタイミングで、教師が地域と連絡をとりながら地域の方と子どもの願いをつなげ、活動が広がるようにした。

(5) 子どもの姿（単元を通じた成果と課題）

- ・大豆づくりを自分たちで一度経験したことにより、失敗したがその分地域の方の工夫やありがたさを感じるきっかけとなったので、上手くいくことだけが生活科の学習ではないことを子どもたちの姿から感じた。
- ・「おんがえし」という言葉は授業のなかで子どものつぶやきから生まれた。子どもたちの声を拾って進めていったことで、活動への取り組みがとても意欲的だったように感じる。
- ・いつも温かく見守ってくださっている地域の方の思いを知る機会は低学年だとなかなかなく、今回は本時の場面で、地域の方から直接手紙をいただいたことで、地域とのつながりをより深く感じる事ができた。
- ・グループ学習では、似た願いをもった児童を同じグループにして話し合いやその他の活動を行ったが、少人数になってしまったグループでは意見があまり出ず、進め方に難しさを感じた。テーマだけで分けるのではなく、異なるテーマでも互いに意見を出し合える学級としての環境をつくる事が大切であると感じた。
- ・「和のいいところたくさんありすぎ！」と直近の授業の時に発言する児童がいて、今後の学習がどのように広がっていくのか楽しみである。身近なテーマは子どもたちにとってもイメージがしやすく、身近な材を用いて、今、目の前にいる子どもたちとどのように進めていくか一緒に楽しみながら考えるのが生活科の醍醐味であり大切な部分だと感じた。

4 川辺小 実践事例 「大豆の時間～大きく育て わたし大豆～」

(1) 授業の概要

学習の流れ	学習内容
1 大豆の種を観察しよう	大豆の種を観察し、模様や色、大きさに気づく。どのように育っているのかに興味を持つ。
2 大豆の種を植えてみよう	大豆を畑とプランターに植える。
3 大豆の成長の様子を観察しよう	大豆が大きく育つ方法について考え、大豆の成長の様子を観察する。【本時】
4 大豆を収穫しよう	実った大豆の収穫方法を学び、実際に収穫する。
5 大豆を変身させてみよう	大豆が変化してできる食品のことを知り、実際に作ってみる。

(2) 材（大豆）について

大豆は、種まきから収穫に至るまでの季節ごとの明確な成長変化を観察することで、植物の成長過程への自然な興味や関心を育むことができる材である。また豆腐やきなこといった多様な食品へと加工することができるため、大豆が形を変えて様々な食品になることを知ることができる材である。

(3) 本時の主眼

大豆を観察して今大豆の成長具合についての気付きや疑問をもった子どもたちが、大豆の成長過程を本や資料で調べることを通して、自分たちが栽培する大豆が大豆の成長過程におい

てどの段階にいるのかを知り、大豆についての自分の疑問や気付きについて考えることができる。

(4) 本時の「環境（場づくり・教師の関わり）」について

- ・児童が抱いた疑問について自分で調べられるよう、資料（本）や、畑から採ってきた大豆の葉や豆を用意し、疑問に応じて自由に調べたり観察したりできるようにした。また、大豆の様子が振り返れるよう、前時に学習用端末を使って大豆の葉や茎、豆の鞘の写真を撮影した。
- ・何を書いたらいいのか困っている児童がいた際には、教師が同じ疑問を持つ児童とつなげられるような声掛けをすることを意識した。

(5) 子どもの姿（本時を通した成果と課題）

- ・それぞれの疑問をもとに、資料や畑から採ってきたものや前日に撮影した写真を活用して進んで調べる姿が見られた。
- ・調べていく中で、子どもたち同士の気付きがつながるとともに、大豆への思いが深まっていく様子があった。
- ・個々で知りたいことや観察したいことに向かって調べたり観察したりしたことで気付きを深めることができたが、全体での意見共有の場面では、子どもたちからの意見が広がったまま終わってしまった。今後は、本時を迎えるにあたり出てきた疑問を「本などで調べれば分かる疑問」と「道具などを用意して観察・追究する疑問」に分けるなどして、本時で考えていく全体での疑問は何なのかをより明確にしていく支援が必要であると感じた。



5 神科小 実践事例 「キャッサバをそだてよう！」

(1) 授業の概要

第1時～3時	キャッサバとの出会い。キャッサバはどんな植物？作物だろう？
第4時～30時	キャッサバを育てよう！
第31時～35時	キャッサバを収穫しよう！
第36時～40時	キャッサバパーティーをしよう！

昨年度お世話になった教頭先生がブラジルの日本人学校で働いていた際よく食べたキャッサバを諏訪の学校で育てられた話と担任が留学をしていた時、ホームシックになった際キャッサバのフィッシュアンドチップスを食べて復活した話を受け、今年的生活はキャッサバ栽培に挑戦しよう！ということになった。調べ学習をする中で、本来ならば年間を通して温暖な気候が適している作物で、収穫まで2年程土の中で育てるのが理想だということ、寒さや霜に弱いということがわかり、できる限り実に栄養が行き届くよう、週に1、2度は必ず畑に行き、水やりや草取りに励み、ついに収穫の日には想像以上にたわわに実ったキャッサバを掘り起こすことができた。キャッサバパーティーはお世話になった方々を招待し、キャッサバフライやタピオカを楽しむことができた。

(2) 材「キャッサバ」について

キャッサバは日本ではなじみがなく、外国に関心を持っている子どもたちに興味深いものである。霜や寒さには弱いものの害虫はつきにくく、長野県でも広い畑があれば容易に栽培できる。また成長した際、2メートル弱になるので、キャッサバトンネルや迷路としても楽しむことができる。

(3) 本時の主眼

キャッサバ栽培のまとめをする場面で、活動時の写真を振り返ることを通して、感動したこと、嬉しかったこと、苦労したことなどを思い出し、まとめることを通して、無事豊作に至ったのはおたすけっとうさんはじめ多くの方々のおかげであることに気付くことができる。

(4) 本時の「環境（場づくり・教師の関わり）」について

- ・これまでの活動の写真を黒板に貼りながら、活動の振り返りをした。
- ・子どもたちのつぶやきに問い返ししながら、みんなで力を合わせて育ててきたからこそ大収穫にいたったこと、多くの方のご尽力や支えなどのおかげで今があることを共有した。
- ・まとめがしやすいように、黒板に貼った写真をプリントにまとめたものを配布し、まとめに活用してよいことを伝えた。

(5) 子どもの姿（単元を通じた成果と課題）

- ・「こんなにふかふかな土ならキャッサバも伸び放題だね！」と栄養満点の土で満たされた土の感触に感動することができた。
- ・週に1，2度は必ず畑で作業し、「キャッサバの木はぐんぐん大きくなって僕より大きくなったよ！本当にジャングルになった！キャッサバトンネルや迷路遊びをしよう！」と草木の成長に感動したり嘆いたり、楽しんだりすることができた。
- ・「野菜や果物をつくるのってこんなに大変なんだ。これからは好き嫌いしないで大事に食べる。」など、農家の方々のご苦労を身に染みて感じ、食べ物を大切にしようという思いも芽生える様子が伺えた。
- ・まとめをする際、思いをかけてきた分、大半の子は感動したこと、嬉しかったことなどを綴ることができたが、文章を書くことが苦手な子への支援に難しさを感じた。次回このようなまとめをする際は、写真に吹き出しを書けばよいなどのアドバイスを前もって考えておきたい。

五 研究のまとめと課題

本年度の研究では、昨年度に明らかになった「魅力ある材」と、子どもの自己発揮を支える「環境（場づくり・教師の関わり）」を基盤として、5校の授業実践をもとに検討を進めた。子どもが対象と夢中になって関わる中で、自らの思いや願いを表し、学びを深めていく姿を多くの場面で確認することができた。

1 「魅力ある材」の選定による主体的な学びの深まりについて

各校が扱った「竹」「ダンゴムシ」「大豆」「キャッサバ」などの材はいずれも、「長期間の関わりが可能」「発達段階に応じて多面的な追究ができる」「子どもの興味・願いに応じて活動が広がる」という特徴をもっていた。

子どもたちは、材そのものの特性に触れながら、「自分のイメージを形にする工夫（竹工作）」「生き物の気持ちや命への理解（ダンゴムシ）」「地域の方への感謝や関わりへの視点（大豆）」「作物を育てる苦労と喜びの実感（キャッサバ・大豆）」など、自身の学びを自分事としてとらえ、活動を深めていった。

魅力ある材の存在が、子どもの「やってみたい」「調べたい」という思いを生み出す役割を果たし、主体的な学びにつながっていくということがわかった。

2 子どもの自己発揮を支える「環境（場づくり・教師の関わり）」の重要性

本年度の実践では、教師の環境づくりが子どもの学びを支える大切な手立てであることが再確認された。

(1) 場づくりの工夫

- ・ 選べる材料、道具の配置（竹の飾り材料、ダンゴムシ実験の素材など）
- ・ 写真、実物など手がかりとなるものの提示
- ・ 子どもたちの実態に合うように、時間や環境にゆとりをもたせること
- ・ 地域の人と直接的、間接的に関われる場

これらにより、子どもは興味の方性に応じて活動を自ら決定し、主体的に関われるようになった。

(2) 教師の関わり

「子どもの願いを丁寧に拾う」「似た思いをもつ友だちとのつながりをつくる」「活動の意味を言語化する手助けをする」「困っている子を別の子の学びとつなげて支援する」など、こうした関わりにより、子ども同士の協力・対話が自然と生まれ、学びが広がっていった。教師自身も、子どもの学びを支える「環境」の一部であることが確かめられた。

3 今年度の研究の成果と課題

1、2で示した「魅力ある材」や「環境（場の構成・教師の関わり）」を整えることで、子どもたちは活動の中で自ら課題を見つけ、調べ、試す姿が多く見られた。また、材への愛着や命へのまなざしが育ち、友だちとの協力、地域の人への思いへの気付きなどの成長も確認できた。

これらのことから、充実した材と環境が揃うことで、子どもは対象に夢中になって関わり、自分の思いや願いに沿って活動を自ら決定し、主体的に関わろうとする姿が見られた。さらに、じっくり向き合う時間、選択の幅、仲間とのつながり、教師の適切な関わりが、子どもの学びを大きく高め、広げることも明らかになった。

一方で、気付きや思いを言葉で整理する力には個人差があり、言語化の支援方法の工夫が必要であることが課題として残った。また、追究が広がる中で全体としての学習の焦点化が難しい場面も見られた。これらを踏まえ、児童理解をさらに深め、多様な子どもへの支援方法を検討するとともに、活動や学びの整理、地域や身近な材の活用方法を探ることで、より「自己発揮する子ども」を育てる授業づくりを追究していきたい。